



TITLE:

京都大学地域研究統合情報センター ーニュースレター, 13

AUTHOR(S):

福田, 宏; 谷川, 竜一

CITATION:

福田, 宏 ...[et al]. 京都大学地域研究統合情報センターニュースレター,
13. 京都大学地域研究統合情報センターニュースレター 2013, 13: 1-14

ISSUE DATE:

2013-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/227185>

RIGHT:

Newsletter

No.13



Photo by Wil de Jong,

- 1 2013 年上半期の地域研ニュース
特別シンポジウム「旅人が見る世界」(第 8 回大阪アジア映画祭)
出版と提携した京大フィールド・データベースの公開
— 世界建築データベースと「グリッド都市」 —
- 3 2013 年度より共同利用・共同研究の新しい体制が始まりました
- 5 CIAS 共同研究ワークショップ「世界のエキス」開催報告
- 6 インタビュー・研究室探訪 9
中央アジア研究の魅力
— 希少資料のデータベース化から旧ソ連圏の「近代」の再検討へ —
- 9 開催報告
国際ワークショップ 東南アジア仏教徒の実践の時空間マッピング
ワークショップ 二大政党制は定着するのか: 2013 年マレーシア選挙の現地報告と分析
ワークショップ 非文字資料研究の理論構築に向けての事例検討 I
ワークショップ 写真でたどろう斑鳩の道: 「斑鳩の記憶」アーカイブ化ワークショップ
- 11 客員研究員紹介
- 12 新規科研の紹介
- 13 旅行記「南米ボリビアの日系人移住地の今を訪ねる」
- 14 出版物の紹介
- 15 今後の注目イベント

特別シンポジウム 「旅人が見る世界」 (第 8 回大阪アジア映画祭)

近年、アジア各国で作られた映画を観る機会が増え、アジア映画の熱心なファンが増えている一方で、「アジア映画」という括りでは興行が成り立ちにくいという声も聞かれます。

ハリウッド映画は、世界中の人が観ることを前提に、観客の文化的背景の違いにかかわらず理解し楽しめるように作られています。主人公が直面する課題も、それが解決に向かう過程も、意外ではあっても誰もが了解できる形で示されます。観客は、外国人であれ異星人であれ、登場人物になりきって課題克服のプロセスを疑似体験し、カタルシスを味わうことができるでしょう。

しかし、多数が共有できる物語では解消されない問題もあります。社会が平和で豊かになるほど、日常生活で実感される個人的なことがらが切実な問題となります。個人的な状況と密接に結びつくと、他人に説明しにくく解決のきっかけを得にくい深刻な問題になります。

アジア映画の特徴は物語の多様さにあります。登場人物が直面する課題や解決の方法はさまざまで、どんな個人的な問題であってもそれをテーマにしたアジア映画の作品を見つけることができると思えるほどです。誰が見ても等しく楽しめるというわけではありませんが、だからこそ他の人にわかってもらいにくい問題を扱った映画を見つけることができます。アジア映画の魅力はここにありますが、その一方で、もはや「アジア映画」という括りでは観客を動員しにくく、興行が成り立ちにくいことにもなります。

アジア映画はさまざまな問題や解決を見せますが、それを自分の物語と重ねて捉えるには、主人公が置かれた状況に関する背景知識が必要となります。ここに地域研究が果たしうる役割があります。ハリウッド映画のような理解が容易で大量動員が確実なコンテンツの魅力は今後もなくならないでしょうが、同時に、特定の文脈に依存することで多様な物語を提供するアジア映画の重要性もますます増していくでしょう。地域研究は、アジア映画が前提とする地域的文脈や時代性をわかりやすく提示することで、一見無縁に見える異なるリアリティを結びつける役割を担うことができます。その一端は、雑誌『地域研究』の13巻2号（特集：混成アジア映画の海）でも提示されています。

地域研では、国内の映画祭と連携して、地域研究の観点から映画の「読み方」を提示するシンポジウムを実施してきました。とくに関西に拠点を置く大阪アジア映画祭とは正式な共催企画としてシンポジウムを実施しています。2013年の映画祭では、共催組織である大阪歴史博物館を会場に、大阪アジア映画祭に出品しているマレーシアのバーナード・チョウリー監督とプロデューサーのリナ・タンさんをゲストに迎え、「旅人が見る世界」をテーマにシンポジウムを開催しました。地域研からは山本博之がマレーシア地域研究の立場から、谷川竜一は建築学の立場からバーナード監督の『イスタンブールに來ちゃったの』を読み解き、ゲストを交えてディスカッションを行いました。

(山本博之)



バーナード・チョウリー監督



リナ・タン氏

出版と提携した京大フィールド・データベースの公開 —— 世界建築データベースと『グリッド都市』 ——

京都大学では海外でのフィールドワークによる研究が盛んです。特に終戦直後から開始された海外フィールドワークによりさまざまな研究成果が発信されてきました。しかし、現地で取得された情報は、研究成果として公開されたもの以外にも膨大なものがあります。それらの情報は、多くの場合、研究者が個別に所蔵しているため、保存状態は不良で、かつ、年々失われる傾向にあります。早急な保存が望まれています。

地域研では、研究者が個別に所蔵するフィールドワークの資料を保存し、当時の様子を知る研究資料として新たに活用するための資料共有化プロジェクトを進めています。高谷好一氏（京都大学名誉教授）の土地利用・生業体系データベースや、山田勇氏（京都大学名誉教授）の世界の森林生態系データベースなどの整理を現在進めています。データベースの構築にあたっては、地域研が開発した情報資源共有化システムを通じてデータを蓄積し発信できる形にしています。

こうした中、京大学術出版会と連携して、一般の方々にも閲覧可能なシステムの構築を進めています。具体的には、同出版会から刊行された書籍の中に QR コードを埋め込み、読者がスマートフォンなどを使ってコードを読み込ませることで、地域研のデータベースにアクセスし、京都大学フィールドワーク研究の成果を閲覧することが可能となるシステムの構築を目指しています。

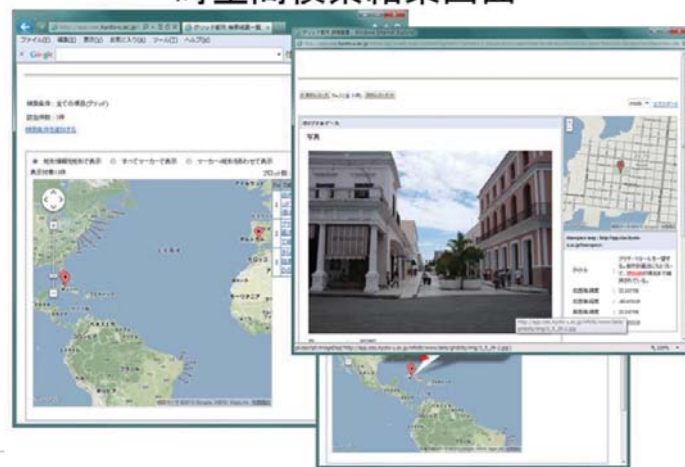
その最初の成果として、布野修司、ヒメネス・ベルデホ著『グリッド都市』の刊行（2013 年 3 月）にあわせて、著者である布野氏（滋賀県立大学教授、建築学）の世界建築データベースの一部を 2013 年 3 月 15 日付けにて公開しました。『グリッド都市』の中に、QR コードをつけた多数の建築関連の図画像があり、それを読み込むことで、関連する写真やデータにアクセスできるシステムになっています。該当する建築物が、世界のどこにあり、どの時代のものかを示す時空間検索も可能としています（図参照）。掲載されている情報は、順次追加してデータを充実させる予定です。

この布野先生のデータベースは、出版会と研究機関とが協力し、研究成果の新たな社会還元の方途を示す活動であり、他の出版物とデータベースの連携にも応用が可能です。また、冊子体か電子媒体であるかを問わず、書籍を通じてデータ利用の可能性が拡大するひとつの方向性を示していると思われます。

（柳澤雅之）



時空間検索結果画面



2013 年度より共同利用・共同研究の新しい体制が始まりました

地域研は、全国共同利用・共同研究拠点として、国内外の地域研究機関から課題の要請や助言を受けつつ、2010～2015年度の6年間の予定で共同研究を実施しています。その折り返し地点となる2013年度初頭に既存の体制を見直し、今年度においては、4つのプロジェクトの下、総括班3、複合同研究9、個別共同研究27、総計39のユニットを展開しています。詳細については、<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/project/> をご覧ください。

【統括班】 関連地域研究プロジェクト：
〈地域〉を測量（はか）る
—— 21 世紀の「地域」像 ——
 （代表：林行夫 地域研・教授）

【複合】 ポストグローバル化期における国家社会関係
 （代表：村上勇介 地域研・准教授）

本複合ユニットでは、グローバル化の潮流が前世紀末のような支配的、一方的な傾向ではなくなっている今世紀初頭の位相について、社会変動の中心的力学を生み出す国家社会関係の観点から分析し、今後を展望することを目的とする。実施にあたっては、体制移行、民主化、福祉、教育など、地域横断的な課題設定を行い、研究対象とする地域が異なる研究者から構成される個別ユニットを立ちあげ、地域間比較研究を基軸にする。

【個別】 ポスト・グローバル化期の教育に関する国際比較：
新自由主義、子どもの権利、国家の役割の再編
 （代表：押川文子 地域研・教授）

【個別】 地域内多様性と地域間共通性の比較政治経済分析：
ポスト社会主義国を軸として
 （代表：仙石学 西南学院大学法学部・教授）

【個別】 中東とラテンアメリカにおける体制転換の比較研究
 （代表：村上勇介 地域研・准教授）

【個別】 ユーロ危機下における南欧諸国のガバナンス変容—東欧諸国との地域間比較の視点から
 （代表：横田正顕 東北大学大学院法学研究科・教授）

【複合】 地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦
 （代表：ウィル・デ・ヨン 地域研・教授、柳澤雅之 地域研・准教授）

世界は、今、自然環境資源をいかに確保するかという大きな課題に直面している。気候変動とそれによる影響、食の安全、安全な水の確保、健康問題や生物多様性の保全は、国内的にも国際的にも大きな関心事となっている。本複合ユニットは、ローカルな人々の自然環境との実践的ななかかわりに焦点を絞った地域研究のアプローチにより、これらの世界的課題の解決に貢献することを目指す。

【個別】 熱帯森林利用のローカル・ガバナンスの可能性に関する地域間比較研究
 （代表：阿部健一 総合地球環境学研究所研究推進戦略センター・教授）

【個別】 アフリカにおける地域植生と植物利用の持続可能性
 （代表：山本佳奈 京都大学学際融合教育研究推進センター総合地域研究ユニット臨地教育支援センター・特定助教）

【複合】 宗教実践の時空間と地域

（代表：林行夫 地域研・教授、小林知 京都大学東南アジア研究所／地域研併任・准教授）

本複合ユニットでは、人々の暮らしのなかで繰り返される宗教実践が生む時空間と、その実践が創出する共同性や絆の動態と動態を、相関型地域研究の視点から比較検討する。ここでは、前複合ユニットの成果を踏まえつつ、宗教に関連した様々なモノやコト（聖地や施設、経典・図像、神話・伝承、宗派・儀礼行為）のマッピングと情報の共有化を推進させ、宗教実践の時空間が構築される歴史的な過程とその動態を明らかにする。

【個別】 移動と宗教実践：地域社会の動態に関する比較研究
 （代表：小島敬裕 地域研・研究員）

【個別】 「功德」をめぐる宗教実践と社会文化動態に関する比較研究：東アジア・大陸東南アジア地域を対象として
 （代表：長谷川清 文教大学文学部・教授）

【個別】 南欧カトリシズムの変容と福祉ビジネスの展開に関する地域間比較
 （代表：藤原久仁子 大阪大学大学院言語文化研究科・特任助教）

【個別】 宗教実践における声と文字：東南アジア地域からの展望
 （代表：村上忠良 大阪大学大学院言語文化研究科・准教授）

【統括班】 地域情報学の展開
 （代表：原正一郎 地域研・教授）

【複合】 「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開
 （代表：原正一郎 地域研・教授）

「地域の知」に関する情報学的な手法の開発を試みる。そのため、これまでの時空間属性に加え、語彙の構造に注目した地域情報学の構築を目指す。複合研究ユニットとして、特に、(1) これまでの地域情報学の研究成果を地域研究へ展開する、(2) 各個別ユニットとのコラボレーションにより、これまでの地域情報学では未着手であったテキストデータの処理と曖昧な時空間表現に関する研究に着手する、の2点について検討を進める。

【個別】 地域に関する時空間基盤情報の収集・蓄積
 （関野樹 総合地球環境学研究所研究推進戦略センター・准教授）

【個別】 地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究
 （代表：山田太造 東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター・助教）

【個別】 学術論文のマッピング・システムを通じた地域情報の統合と共有化
 （代表：山本博之 地域研・准教授）

【複合】非文字資料の共有化と研究利用

(代表：貴志俊彦 地域研・教授)

文字資料とともに、図画像資料、映像資料、音声資料などの、いわゆる非文字資料は、個人、集団、組織を問わず、地域や歴史の記憶としてだけでなく、人々の集合的記憶を反映させていることが指摘されており、近年その学術利用の価値が再認識されている。本複合ユニットは、歴史学、美学、カルチュラル・スタディーズ、表象文化論、メディア論などのディシプリンを連携させて、地域研究における非文字資料の研究や解釈の方法について共同討議することを目的とする。

【個別】写真雑誌に見る第二次世界大戦期の記憶とジェンダー・エスニシティの表象分析

(代表：杉村使乃 敬和学園大学人文学部・准教授)

【個別】20 世紀前半のサハリン島に関する歴史的記憶

(代表：兎内勇津流 北海道大学スラブ研究センター・准教授)

【個別】集合的記憶と中東欧地域の音楽：比較研究に向けてのデータベース構築

(代表：福田宏 地域研・助教)

【複合】CIAS 所蔵資料の活用

(代表：柳澤雅之 地域研・准教授)

地域研には、映像・画像・フィールドノート・古文書・公文書・新聞情報・統計資料等を組み合わせた、地域研究関連の様々なデータベースが整備されている。本複合ユニットでは、こうした所蔵資料を利用し、関連する個別ユニットと連携しつつ、情報学の技術を援用した新しい地域研究（地域情報学）の展開を目的とする。ここでは、地域研究の促進に必要な、データの収集、共有、分析、発信の方法を検討しつつ、地域情報学の一層の発展を目指す。

【個別】書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る

(代表：帯谷知可 地域研・准教授)

【個別】『乾隆京城全図』と空間画像史料を用いた「華北・北京歴史データベース」の構築

(代表：北本朝展 国立情報学研究所・コンテンツ科学研究系・准教授)

【個別】映画に見る現代アジア社会の課題

(代表：篠崎香織 北九州市立大学外国語学部・准教授)

【個別】脱植民地化期の東南アジア・ムスリムの自画像と他者像

(代表：坪井祐司 (財)東洋文庫・研究員)

【統括班】強くしなやかな社会をめざして：地域研究の可能性

(代表：山本博之 地域研・准教授)

【複合】災害・紛争と復興

(代表：西芳実 地域研・准教授)

災害や紛争は、個人や社会が直面する目の差し迫った人道上の危機であり、直接被害を受けていない地域を含む外部社会から解決のための働きかけが行われる。また、災害や紛争の被害はしばしば複合的な形であらわれるため、要因の究明や対応にあたっては、多様な専門性が求められる。本複合ユニットでは、以上のことを念頭に置きながら、紛争・災害への早期対応や復興過程における社会の再編について、実務者や現地社会との連携を視野に入れながら研究を行う。

【個別】「小さな災害」アプローチによる紛争・災害に強い社会づくり：災害地域情報マッピングシステムを活用した社会問題の早期発見・早期対応

(代表：西芳実 地域研・准教授)

【個別】社会紛争の総合分析に基づく解決・予防の研究：ラテンアメリカの事例から

(代表：村上勇介 地域研・准教授)

【複合】記録・記憶と社会の再生

(代表：谷川竜一 地域研・助教、山本博之 地域研・准教授)

社会の記録としての文化や集合的記憶は、グローバル化などの変化を乗り切るための各社会内における紐帯として重要な役割を担うと同時に、その社会を硬直させる足かせともなりうる。本複合ユニットではそうした矛盾を意識しながらも、文化や記憶を各社会が危機や急激な変化を乗り切るために不可欠なものとして捉える。具体的には、紛争、災害、社会間の対立や格差などに見舞われた社会において、有形無形の記録・記憶の収蔵庫が編み出され、活用される事例を考察する。

【個別】災厄からの再生のための記録と記憶の〈場〉：災害・紛争後の記憶をつなぐ実践・支援とその可能性

(代表：寺田匡宏 人間文化研究機構・総合地球環境学研究所・特任准教授)

【個別】建築を通じたポピュラー文化の記憶の場の構築力の解明

(代表：山中千恵 仁愛大学・准教授)

地域研究方法論プロジェクト

【複合】地域研究方法論

(代表：山本博之 地域研・准教授)

本複合ユニットでは、地域研究の手法を対象地域や分野の違いを超えて共有可能なものとするべく、(1) 多様な専門性を持つ研究者が協働する仕組みとしての地域研究の歩みを踏まえた地域研究の意義と方法、(2) 研究者以外の専門家・実務者による成果の活用を意識した地域研究の方法、(3) 自身が社会生活する存在としての地域研究者の生活と研究の両立などの諸課題についての検討を通じて、学術研究と社会のそれぞれにおける地域研究（者）の位置づけを考える。

【個別】アジアと日本を結ぶ実践型地域研究

(代表：安藤和雄 京都大学東南アジア研究所・准教授)

【個別】物語を基にしたコミュニティづくりを目指す地域研究

(代表：笠井賢紀 龍谷大学社会学部・専任講師)

【個別】官公庁や民間企業やマスコミと接合される地域研究の方法論の検討

(代表：立岩礼子 京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所・主任研究員)

CIAS 共同研究ワークショップ「世界のエスキス」開催報告

2013年4月27日、地域研は、共同研究ワークショップ「世界のエスキス」を開催した。以下、開催内容を報告するにあたり、本ワークショップに参加して下さった皆様、コメンテーターの方々に、まず厚く御礼申し上げたい。

エスキスという言葉は、建築分野では、計画案と与条件の変化や現状に対応させながら、練り直していく作業そのものを指す。設計図や企画案を、何人もの人々と議論し、修正・刷新し、実際の場所の状況に合うようにもっていき、そしてその知見を再びフィードバックする…そんな営為のくり返しがエスキスなのだ。そうだとすれば、地域の現場と学問の現場の往還を通して、地域像を練り上げていく地域研究者たちの姿勢もまた、エスキスである。本ワークショップでは、地域研究者たちの分析手法や思考の構築作業をエスキスという観点で捉え、そこから描き出される地域像を持ち寄った。それによって、より豊かで手応えのある地域の見方・あり方を議論し、導き出そうというのがその趣旨であった。

まず、柳澤雅之の発表「地域のコンパス：ベトナム紅河デルタの『自然』を読む」では、自然科学出身の地域研究者によって構想された地域像——特に地域区分図が、具体例とともに論じられた。

次に、谷川竜一の発表「 Δ 3.75度の近代：韓国・景福宮前の建築交代を読む」では、韓国ソウルの近代都市空間と、その中心の一つである朝鮮王朝の宮殿について、それぞれの空間軸に着目した建築学的な分析がなされた。

そして、山本博之の発表「ヤスミンの物語：マレーシア映画に表れる秩序と抵抗」では、地域研究と映画をテーマに据え、映画『チョコレート』、『タレントタイム』などを例にして、マレーシア社会における物語とその破壊、その後の物語再構築に関する議論が行われた。

ワークショップ後半における福田宏の発表「ビールと鉄棒：ナチス・ドイツのオリンピックとチェコのマスゲーム」では、ビールと鉄棒（アルコールと身体）の関係をを通して、工業化やナショナリズムの生成の過程などが論じられると同時に、スポーツ＝体操論争の歴史的な読み解きがなされた。



最後の村上勇介による発表「パチャママの涙と夢：ペルー社会の亀裂克服の試み」では、ペルーにある一つのモニュメント彫刻を対象に、背景となる現代社会史や事件と、それに附随する記憶の分析がなされた。発表者は、このモニュメントをペルー社会の「涙」として読み解きつつも、それが新しい社会の創造の過程にある、いわば未来への「夢」として位置づけられるという建設的な議論を行った。

これらの発表に対し、コメンテーターであるドイツ現代史研究者の川喜田敦子氏からは、形態を現実の象徴と見なし読み解くことは、形態を絶えず変わりゆく実態のデフォルメとして読み解くことに他ならず、時に実態を固定的なものとして理解しかねない二面性をはらんでいることが示唆された。それを受けて、同じくコメンテーターのランドスケープ・デザイナー・石川初氏により、氏の実際の設計活動の経験を踏まえつつ、自分の考えを他人の目で読み直す機会がエスキスであり、それはアイデアを異なるものへと変化させるための動的な理解の場であるという視点が提供された。そして最後のコメンテーターである映画監督の深田晃司氏は当日参加できなかったが、ビデオレターでコメントを寄せて下さった。深田氏は映画監督という視点から、今回の各議論が一つの主観と主観のパッチワーク——まさしくフィルムを扱う映画監督ならではの言葉だろう——であり、ズレを補正しながら、皆で世界観を変容させていく作業だったと位置づけた。こうしたコメントによりディスカッションが充実したものとなり、その後のアンケートでも多くの好意的な感想を頂くことができた。

各分野の研究者が持つ形態に対する読み解きの手法は、名人芸のように披露されることはあっても、手法そのものを分かりやすく解説しながら、同時に研究内容までも提示するということは一般的にはあまりされてこなかった。今回その両方を議論の遡上にのせ、知見の共有を目指して、発表者たちは準備を重ねた。こうしたことは、主に文字情報を蓄積してきた地域研にとって大きな挑戦であった。また形態を読み解くことを通して地域像を提示し、さらにその未来までも考えようという本ワークショップは、まさしく「エスキス」というタイトルにふさわしいものだったと考えている。その甲斐あって、100人を越える様々な業種や分野の方が本ワークショップに参加して下さい、そこで互いの議論を深めることができた。

学術的な考察を深めながら、そこに満足せずに対象地域に向けたクリエイティブな議論として外に開いていく、地域研ワークショップが目指すのは、そうした創造的場所だ。地域研ではすでに来年度のワークショップに向けて準備が始まっている。さらなる盛会を目指して、これからスタッフ一同学術活動に邁進したい。（谷川竜一）

中央アジア研究の 魅力

—希少資料のデータベース化から 旧ソ連圏の「近代」の再検討へ—

「研究室探訪」では、地域研究をめぐる議論を豊かにすることを期待して、さまざまな方にお話をうかがいます。第9回は、旧ソ連中央アジア地域の近現代史を探究しつつ、希少史資料の共有や保存のプロジェクトにも積極的に関わられている帯谷知可准教授（地域研）です。

● 話し手・帯谷知可（地域研准教授） × ● 聞き手・和崎聖日（地域研研究員）

和崎 ● 現在は中央アジア近現代史および中央アジア地域研究をご専門とされていらっしゃいますが、この分野の研究を始められた経緯についてお話を聞かせていただけますか。

帯谷 ● もともととは外国語大学のロシア語専攻出身なんです。大学でロシア語と、ロシア・ソ連史を勉強する一方で、井上靖の西域小説にかぶれたりして、日本人にしごくありがちなシルクロードとか中央アジアとか西域に対するぼんやりとした、半ばロマンティシズムにあふれた憧れのようなものが、高校生ぐらいからあったんですね。原卓也先生のロシア文学の授業で、アンドレイ・プラトーノフという作家の短編小説『粘土砂漠』の講読がありました。ロシア革命期のトルクメニスタンの砂漠地帯を舞台とした、貧しいトルクメン遊牧民の少女が主人公の物語です。その不遇の身の少女が、数奇な運命をたどりながら、ソヴィエト政権に助けられて砂漠を脱出し、やがてソヴィエト型の教育を受け農業技術の専門家になって、最後にはその粘土砂漠に帰っていくという粗筋です。読み方はいろいろあると思いますが、そのとき私にとって印象深かったのは、その作品の最後の部分—波瀾万丈を経て、でもやっぱり彼女が故郷へ回帰していったというところでした。そうして、ソ連の中に中央アジアという地域があるんだと改めて認識するに至ったんです。ちょうど、ロシア革命期の歴史が面白いと思っていたこともあって、ロシア革命期の中央アジアのことを勉強してみたいと思ったわけです。

和崎 ● 中央アジアに具体的な魅力を感じて、その地域の研究を始めるきっかけとなったのは、そのアンドレイ・プラトーノフの作品なんですね。

帯谷 ● はい、そうです。『粘土砂漠』の中に、たまたま、ロシア革命後の中央アジアの現地住民による反ソ運動「バスマチ運動」の反徒たちの話がちょこっと出てくるんですね。なぜか、私はそれにとっても反応してしまって、卒業論文でこのバスマチ運動を取り上げて、いろいろ調べてみたというのが、具体的なテーマを持って中央アジア研究に足を踏み入れる始まりだったかなと思います。ここしばらく、直接的にはバスマチ運動研究からはだいぶ離れてしまっていますが、ロシア革命のときに中央アジアで一体何が起こったのか、時代性と現地の視点を入れて考えると、とても面白いものがあると今でも思っています。

和崎 ● 中央アジア地域研究の面白さや魅力について、今少しお話にもありましたが、どのように考えていらっしゃいますか。

帯谷 ● ロシア革命期に対する関心からスタートしているので、当初は歴史研究をやっていきたくて思っていました。けれども、その後、ソ連解体という予想もしなかった大きな出来事があって、ソ連から独立したウズベキスタンで日本大使館の専門調査員を務める経験もし、「現在」のことに興味を持たざるをえない状況になりました。私なりに思うに、19世紀後半から20世紀初頭の時期に中央アジアが経験した、ロシア・ソ連経由の変革や近代化、

●おびや・ちか 東京大学
大学院博士課程中退。同教
養学部助手、在ウズベキス
タン共和国日本国大使館専
門調査員、国立民族学博物
館地域研究企画交流セン
ター助手・助教授を経て、
2006年4月から現職。主
な業績として『朝倉世界地
理講座 大地と人間の物語
5 中央アジア』朝倉書店、
2012年（北川誠一・相馬
秀廣との共編）など。

そしてソ連解体以降の体制転換、これら二つの時期に起きていることは、共通の問題として認識できる部分が多いのです。そのことに途中から気がつきました。例えば、民族についての問題、イスラームと女性をめぐる問題、社会の近代化など、ロシア革命期に、そして1920年代以降のソヴィエト体制下で散々議論され、現地の人たちも巻き込んで、いろいろな形で試行錯誤が行われた問題が、今また独立後の中央アジア社会にとって重要なアジェンダになっているということがあって。近現代史の研究テーマと現代社会の問題というのが、かなり直接結びつく、1つの線上で考えることができるし議論ができるということが最近面白いと思っています。

和崎 ●ここ数年、本センターで進められている「トルキスタン集成」データベースについて、ご説明いただけますでしょうか。

帯谷 ●「トルキスタン集成」というのは、ウズベキスタンの国立図書館に所蔵されている、全594巻からなるロシア帝政期に集められた中央アジア関連刊行物コレクションです。現在、このコレクションの書誌検索データベースの試行版が地域研のホームページ上で公開されています。ロシア帝政期には、現在のウズベキスタンの首都タシュケントにトルキスタン総督府という行政府が置かれていて、その初代総督カウフマンの命で中央アジアに関するロシアとヨーロッパの刊行物を可能な限り収集したものが「トルキスタン集成」です。書誌としては1万件を超える刊行物が入っていて、雑誌や新聞の論文、単行本、統計集、地図等玉石混交のコレクションとっていいと思います。1999年に私が実際にタシュケントの図書館で現物を閲覧したところ、ページがパラパラとこぼれ落ちてしまうようなものもあるような状態でした。マイクロ化もされてはいるものの、ソ連解体以降、図書館も経営難で、マイクロリーダーが壊れていて使えず、

利用者には現物が提供されていました。そういう状況を見て、非常に面白そうな資料群で、自分が使ってみたいということもあったのですが、資料が置かれている状況があまりにも残念で、それを現地の人と協力し、数年かけてデジタル化しました。それをもとに、今のデータベースが作られています。

和崎 ●デジタル化されたこのコレクションをフルセットで所蔵しているのは、日本では本センターと北大スラブ研究センターだけです、世界でもごく僅かですね。

帯谷 ●そうですね。もともと、うちのセンターにはCD122枚の形で入っていて、それが図書館にあって、日本にいながらにしてそれを見られるということで個人的には非常に満足していたんです。地域研で地域情報学のデータベース構築が進み、せっかくなので、これをさらに使いやすい形にということで、プロジェクトに乗せていただきました。「トルキスタン集成」の場合には、ロシア帝政期とソ連期に作られた冊子体の書誌目録があるんですが、完全な書誌情報が整備されていないのです。それを整備しながら、同時に書誌情報検索と資料現物の閲覧ができるような形のデータベースを構築できれば、現物のデジタル化ということに加えて書誌整備という点でも、意味のある現地還元にもなっていると思います。世界的にも「トルキスタン集成」の完全な書誌情報は今のところ存在していない状況ですので、やる意義があると思っています。ここ数年この仕事に集中していますが、私の研究上の関心がかなり分散していた時期があって、そんな時に子どもが生まれたので、しばらくあまり自由がきかない状況の中、研究室でできる仕事に集中したほうがいいかなと考えたことも、この仕事に取り組むきっかけの1つでした。最近では、書誌情報を整備しながらいろいろ発見もあって、「トルキスタン集成」のデータベースを構築する傍ら、「トルキスタン集成」のようなコレクションがなぜ、どのように構築されたのか、そしてどのように利用されたのかということなどを最近活性化しているロシア帝国論の分野で自分の研究としても考えていきたいと思っています。データベース試行版はとてもオーソドックスな書誌情報検索のデータベースですが、そこにコレクションが形成された背景や様々なキーワードの連鎖などを入れ込んでいくと、書誌情報をベースとするデータベースでありながら、図書館サービスのではない、地域研究者の視点が生かせるようなデータベースになる可能性もあるかもしれないということで、今リニューアル・バージョンを検討中です。

和崎 ● 今後はどのような形でご研究を展開されていくイメージでしょうか。

帯谷 ● 「トルキスタン集成」については、おそらく帝政ロシアが構築しようとした中央アジアに関する「知」という観点からアプローチできるのではないかと思います。例えば、様々な分類カテゴリーとそこから派生するキーワードなどから、西洋科学を背景にした「知」の体系をもって中央アジアを見た帝政ロシアのまなざしに迫ってみたいです。そしてその「知」は、ロシア革命という大きな体制転換を挟んで、ソヴィエト時代にもおそらく継承されていったという側面があり、それが、今度はソヴィエト時代の初期社会主義建設にも生かされていったはずです。もうひとつ、最近の私の関心としては、少し大きな枠組みでいうと、1920年代の社会主義的近代化の問題と、ソ連解体後のウズベキスタンや中央アジアで今起こっているいろいろなことを引き比べて考えたときに、重要なのは近代化なんじゃないかなという気がしています。近代化というか、「近代とは何か」をもう一度、今あらためて問うことですかね。ですから、帝政期から出発して、ソ連時代、そして現在を通して、なんらかの分野を切り取って見たときに、そこで何が起こってきたかということを、通時的に再検討する試みも大事なかなと思っています。そこで何か一本つながるトピックを自分でも探したいと思っていますところですよ。

和崎 ● 旧ソ連圏の現状についてはカラー革命がよく話題として取り上げられますね。2003年グルジアのバラ革命、2004年ウクライナのアレンジ革命、2005年クルグズスタン（キルギス）のチューリップ革命の3つをまとめて、しばしばカラー革命と呼ばれています。旧ソ連圏のこうした革命は、いずれも、市民の運動からほぼ無血で政権交代が行われたわけですが、メディアではそういう文脈でも注目されていますね。中央アジアの民主化という点ではいかがでしょうか。

帯谷 ● 中央アジア全体として見ると、例えばフリーダムハウスの自由度評定でいえば、もうほとんど全部 Not Free という感じですが、中央アジアの中で見ると、比較的民主化が進んで自由であるといえる国々もあれば、閉塞的な状況に陥っている国もあります。和崎さんが仰ったとおり、2005年にクルグズスタンでチューリップ革命が起こり、結果として政権交代が実現しましたが、それは民主化には必ずしもつながりませんでした。その後、さらにアラブの春との連動という見方も加わって、民主化をめざした政権交代劇のドミノ現象が中央アジアにも及ぶのではないかとというようなこともいわれましたが、やはり現実問題として、中央アジアには大々的には飛び火しませんでした。これは、旧ソ連的な権威主義のもとでの市民社会の成熟度とか、一般の人たちがどれくらい政治に関心を持っているとか、

●わさぎ・せいか 中央アジア地域研究、人類学。京都大学大学院人間・環境学研究科修了。日本学術振興会 PD (2009～2012年)、立命館大学国際関係学部非常勤講師など。主な業績として『ソ連解体以後のウズベキスタンにおける家族と相互扶助に関する人類学的研究』京都大学博士学位論文（人間・環境学）、2012年など。

そうしたことと関わりがあるような気がします。アラブの春が起きて、イスラーム世界つながりということで、じゃあ中央アジアも共鳴するかと…。おそらくアラブの春は、現地の感覚としては、すごく「遠い」ところで起こったことだったと思います。ウズベキスタンに限っていうと、一般の人たちにとっては、民主化への希求を公に表現していいということ自体が馴染みのないことになってきてしまっているような現状があって…。2005年、一般市民に対する弾圧とも、外国勢力によるテロ事件とも評されるアンディジャン事件が起きましたが、それ以降、ウズベキスタンでは不気味な静けさが続いているという印象を私は持っています。閉塞感や人々の不安も増しているんだけれども、統制も厳しいということで、膨らんだ風船が上から抑えつけられているようなイメージだと、ここ数年ずっと思っているんです。独立以来の長期政権に鑑みれば、次の政権交代の時に事態が流動化する可能性もたいへん心配だと思っていますし、一方で社会の中で自由化や民主化に関する議論が自由にできるようになり、市民社会が成熟していく契機がもっと増えて、多様な見方が出てくるには、とても時間がかかるのだらうとも思います。

和崎 ● やはり、今の社会にとって、デモクラシーはキーワードであると。

帯谷 ● そうですね。それも含めて、「近代」が問題になると思うのです。それを、必ずしも欧米を模倣する、欧米流の民主化とか民主主義とか市民社会を模倣するのではなくて、中央アジア的なものを見出す方向で探っていく可能性もあるだろうと思います。でも、そのためにはやはり自由に議論ができることが必要ですよ。

和崎 ● そうすると、中央アジアの今後についてはまだまだ目が離せないということになりますね。今日はどうもありがとうございました。

Workshop 国際ワークショップ

東南アジア仏教徒の実践の時空間マッピング

2013年2月26日から28日にかけて、タイ国チュラーロンコーン大学で国際ワークショップ「東南アジア仏教徒の実践の時空間マッピング（Mapping Practices among Theravadin of Southeast Asia in Time and Space）」を開催しました。本ワークショップは、2011年8月に地域研とMOUを締結したチュラーロンコーン大学社会調査研究所（CUSRI：Chulalongkorn University Social Research Institute）ほかとの共同開催の形で実施されました。

当日は、地域研のほか、京都大学東南アジア研究所、文教大学、立命館アジア太平洋大学の教員・研究員、タイ人研究者が12の発表を行いました。タイ側からは、研究者、大学院生のほか、国家仏教庁要職者、地方支所関係者、マハーチュラーロンコーン仏教大学（MCU）仏教研究所所長、調査地の一つであるウボン県コーンチャム郡に止住する僧侶など、2日間でのべ50名が参加しました。報告・質疑応答は、日本語とタイ語の通訳を介して行ったこともあり、活発な討論と意見交換がなされました。タイ側の情報学者もふくめた参加者の関心は高く、国家仏教庁局長への表敬をかねたプレゼンテーションもなされたほか、MCUからは5月21日に同大学で開催された国際仏教徒研究会議での発表招聘も受けました。

ワークショップでの意見交換で興味深かったのは、調査地の僧侶や地方支所の役人からの発言です。コーンチャム郡における未登録の寺院施設の増加について、中央からの参加者が法的規制からの逸脱であるかのようにコ

メントしたのに対し、地元の僧侶や役人は、これを地域で継承されてきた実践形態であるとし、住民の法的無知によるものとは説明しませんでした。

また僧侶や国家仏教庁の要職者たちが、タイにおける出家者の減少に対し、相当の危機感を抱いていることも印象的でした。本プロジェクトでは雨安居期間中に調査を行いました、「出家者の多い雨安居期間中ではなく、出家者が減少する雨安居明けの時期こそタイ仏教の現実を示しているのではないか」という意見もありました。そしてこの問題を解決するために、他国の事例から学ぼうとする真剣な姿勢が感じられました。

さらに「タイ国内でもっと多くの地域で調査を行うべきではないか」、あるいは「同じASEANの加盟国であるラオスのデータも紹介してほしいかった」、など今後の活動への指針となる要望も出されました。一方的に調査地からデータを集めるのみならず、収集したデータを調査地の人々と共有し、議論することの重要性と面白さを再認識させられた2日間でした。

最終日には、チュラーロンコーン大学の大学院生の案内で、チャチュンサオ県にあるワットソトーン・ワラムハウイハーンなどを見学しました。対象地域が異なる研究者がフィールドをともにすることによって、思わぬ発見もあり、収穫の多いワークショップとなりました。

（小島敬裕）



Workshop

ワークショップ

二大政党制は定着するのか：2013年マレーシア選挙の現地報告と分析



マレー人、華人、インド人の3民族にサバ州とサラワク州の2地域を加えた5つの区分からなる多民族・多宗教・多言語社会マレーシアでは、民族別・地域別に政党が結成され、それらが連立して政権を担当してきた。多数派（マレー人）の政党を中核とする与党連合は、連立の構成政党に多少の入れ替えは見られるものの、今日ではアジア

最長の政権党となっている。その一方で、民族や地域を超えて結成された野党による連合も支持を拡大しており、インターネット上で相手陣営を批判し合うネット選挙が行われるなか、マレーシア史上で初めて政権交代が現実的なものとして語られた選挙が2013年5月5日に実施された。議席数では与党連合が過半数を占め、政権交代は実現しなかったが、得票数では野党連合が与党連合を上回り、この選挙を通じてマレーシア社会内部の断絶が顕在化した。地域研では、総選挙から2週間後の2013年5月19日に公開ワークショップを開催し、多民族社会で民族政党の連合体どうしによる二大政党制は定着するのか、ネット選挙は現実の政治をどれだけ反映しているのか、選挙によって顕在化した社会の亀裂はどのように修復されるのかなどを検討した。研究会の内容は共催組織である日本マレーシア学会（JAMS）のウェブサイトで公開される。（山本博之）

Workshop

ワークショップ

非文字資料研究の理論構築に向けての事例検討Ⅰ

2013年6月30日、地域研共同研究・共同利用プロジェクト、NIHU 現代中国地域研究・東洋文庫拠点、科研の合同主催で、北海道大学を会場としてワークショップを開催した。

当日の午前中は、米国公文書館（NARA）が所蔵する琉球米国民政府（USCAR）制作の広報動画、および同機関が発行した『守礼の光』を全員で閲覧しながら、議論が交わされた。午後、ひきつづきワークショップを開催した。そのプログラムは、以下のとおり。

1. ワークショップ開催の趣旨説明（司会：貴志俊彦）
2. 長谷川怜（学習院大学）「目で見る日本の大陸政策：戦前教育における満洲の教え方」
3. 高本康子（北海道大学）「大陸関連報道写真に見る『大東亜』の宗教」
4. 竹内美帆（京都精華大学）「線から捉える『劇画』」
5. 田村容子（福井大学）「1950年代の連環画にみる女性像」
6. 兎内勇津流（北海道大学）「スラブ研究センターが所蔵する北樺太関係画像資料：どのように読み解くか」
7. 総合討論（司会：武田雅哉）

このワークショップでは、非文字資料に見られる図画像資料の内容のみならず、様式や形態の読み方の重要性が強調された。また、空間の構成と粗密、描かれた対象とこれを見る側の視線とその角度、描く技法とその工具、ジェンダー性、非文字ならではの資料批判の方法が指摘されるなど、今後事例検討を重ねるうえで考えるキーワードが少なからず提示された。「非文字資料研究の理論構築に向けての事例検討」の試みは、今後も継続される。関心のある研究者の協力を望みたい。（貴志俊彦）



Workshop
ワークショップ

写真でたどろう斑鳩の道：「斑鳩の記憶」アーカイブ化ワークショップ

2013年6月30日、地域研と斑鳩町立図書館・聖徳太子歴史資料室の共催で、「写真でたどろう斑鳩の道：『斑鳩の記憶』アーカイブ化ワークショップ」を開催した。現在、



地域研・斑鳩図書館・RADが共同開発したデータベース

地域研助教・谷川により、日本を含むアジアの近現代建築のデータベースの整備が進みつつあるが、そうした専門的情報に、生活情報（例えば田畑や植物、野鳥、池や川、地域の行事

や生活の記憶など、地域の環境と生活を支え彩る情報）を加えながら、持続的な収集・整理・活用を行うプラットフォームの開発を推進している。そのパイロットプロジェクトとして、これまで筆者が調査を進めてきた奈良県・斑鳩町における図書館内「聖徳太子歴史資料室」をカウンターパートとし、ワークショップを通じて地域情報の管理データベースの開発を行った。具体的には、地域の写真家や郷土史家たちを中心に約20人が同資料室に集まり、斑鳩の古写真とその記憶を書き起こし、街並みや道などを手がかりにそれらを連関させ、共有を図った。データベースは秋にも公開予定で、京都出身の建築系キュレーション組織RADの協力を得て、図書館に通う郷土史家たちが扱いやすいようなデザインとなるようアレンジを加えている。（谷川竜一）

客 員 研 究 員 紹 介



Mexico and Japan: Trade Patterns, Production Networks and the Role of Japanese Foreign Direct Investment 2005-2011: A Comparison with Selected Asian Countries and Implications for Public Policy

Melba Falck

University of Guadalajara, Mexico（任用期間：2013年4月1日～6月30日）

Fragmentation of Production is the new way at which Multinationals (MNS) are organizing production in the 21st Century as many plants scattered around the globe participate simultaneously in the production of intermediate and final goods. Nowadays intermediate goods have the greatest share in international flows of trade and they are closely linked to Foreign Direct Investment (FDI). Japanese MNS have been major players in these new patterns of trade and investment contributing to the formation of production networks in Asia.

In the past decade, flows of Japanese investment have spurred into Mexico to the Transportation Equipment Sector. Nissan, Toyota and Honda are major players in the domestic and export markets of Mexico. The aim of my research at CIAS was to assess the impact of Japanese foreign investment in the formation of production networks in Mexico compared to those to Thailand. The importance of this comparative study lies on the fact that as Thailand has become the hub for the Japanese Foreign Investment in the transportation equipment sector in Asia, more local suppliers have joined the supply chains with a positive impact on Thailand's development. My preliminary findings, using firm-level data, indicate that in both countries Japanese affiliates are playing an important role in the intermediate goods trade and in the case of Mexico they are promoting transpacific flows. However, in the case of Thailand, investment by Japanese affiliates is related to a higher degree to the type of 'Networked FDI' than in Mexico.



Postcolonial Identities in Asian Cinema: Asians in Japan, Japanese in Asia

Andrijana Cvetkovik

European Film and Theatre Academy（任用期間：2013年7月1日～10月31日）

My research is focused on Japanese cinema, emphasising the way cinema shapes the society and maintain the hero system and gender values. I employ a model of examining the interrelation of socio-cultural processes that directly influence the national and transnational identities conditioned by global issues, long-standing structures of power, collective memory, as well as the displacement of people, trends and ideas that operate within a larger context of the pan-Asian cultural map. Currently, I am examining the discourse between imagination, memory, ethnic and gender representations of Japanese in East Asian cinema, especially within the discourse of the postcolonial relationship between Japan, Korea, Taiwan, Hong Kong, China, Malaysia and Indonesia.

生活世界の変化とジェンダー： インド高齢女性のライフヒストリーを通して

2013～2015年度 基盤研究（B） 代表者 押川文子

2000年代に入って加速した経済成長のもとで、消費社会化などインド社会の変化に注目が集まっている。その背景には、すでに1970年前後から、家族のなかの世代やジェンダーの関係、子育てと教育、そして高齢者のあり方など人々の「生活世界」が、地域社会や国全体の動きと呼応しながら少しずつ変化してきたことがある。本研究は、インドの「生活世界」の過去数十年の変化を、女性の視点から記録し、分析しようとするものである。

生活世界の変化については、全国標本調査（NSS）や全国家族保健調査（NFHS）など大型統計による全体的な傾向分析と特定地域やコミュニティを対象とした人類学的研究が蓄積されてきた。本研究では、その「中間の領域」、すなわち生活の直接の基盤である村や都市レベルで社会経済や生活環境の変化と個人の生活世界との関わりに注目する。そのために、経済発展の異なる3地域の農村・都市を取り上げ、60歳以上の女性、すなわち1950年前後に生まれ70年代から80年代にかけて家族形成した女性を対象に詳細な聞き取り調査を行い、衣食住、結婚と出産、子育てや教育、家族関係などについて記録を残すとともに、生活世界の変化を地域の社会経済の変化の中に位置付ける分析を予定している。



タイ国チャオプラヤデルタ治水対策の検討： 農村社会の利害調整経験を踏まえて

2013～2015年度 若手研究（B） 代表者 星川圭介

2011年のタイ国チャオプラヤ川大洪水の際には、日系企業が立地する工業団地やバンコクの被災状況が日本でも大きく報じられたが、その陰でバンコク周辺の農村部もまた、一か月以上の長期にわたって冠水状態に置かれた。チャオプラヤデルタは元来洪水常襲地域である。上流のダム建設や治水事業に伴って頻度や規模は減少しているものの、洪水年には本流や支流沿いで河川氾濫が生じるという状況は未だ変わっていない。そして氾濫水や氾濫を生じ得るような河川流出は、水門の操作や堤防・土嚢によって経済的重要度の低い農村部へと人為的に導かれる（あるいは留め置かれる）のである。2011年大洪水後の治水対策にも、バンコク上流の水田地帯を遊水地として活用する計画が盛り込まれた。これは地権者への補償を伴うもので、暗黙の了解のもとに農村部が氾濫水を受け入れてきた状況からの進歩とはいえるが、農村部でもまた生活様式や農業体系の変化により洪水に対する脆弱性は増加している。本研究では、洪水頻発地域であるタイ国チャオプラヤデルタの水田地帯において農民たちがどのように洪水に対応しているかを明らかにした上で、現在タイ政府が進めているチャオプラヤデルタにおける治水対策が、農村部に負担を押し付けない形でどのように実施可能かを示す。



チャオプラヤデルタの水流を制御する水門の一つ。制御方法を巡ってしばしば農民たちが抗議に押し掛ける。



南米ボリビアの日系人移住地の 今を訪ねる

岡田 勇

おかだ いさむ……日本学術振興会特別研究員PD。専門はラテンアメリカ地域研究・比較政治学。

南米大陸は日本から遠いが、これまで20世紀を通じて多くの日本人が移住し、現在でもブラジルやペルーを始めとして数百万人の日系人が居住すると言えば、少し違って見えてくるのではないだろうか。

2011年9月、ボリビアで仕事をしていた頃、たまたまサンタクルス県のサン・フアン日系移住地の農協会長と知り合いになり、彼の地を訪ねることになった。仕事場のある首都ラパスからサンタクルス県サンタクルス市までは飛行機で1時間あまりである。首都ラパスが海拔3500メートルを超すアンデス山脈の中に位置するのに対し、サンタクルス市はパラグアイ西部からブラジル南西部、アルゼンチン北部へと広がる大平原（大チャコ地方と呼ばれる）の端に位置しており、海拔400メートル程度で温暖な気候である。そのサンタクルス市からおおよそ120キロほど離れたところに、2つの日系移住地が存在する。オキナワ移住地とサン・フアン移住地である。

私が訪れたサン・フアン移住地は、人口こそ数百と少ないが、日系二世世代でも日本語をよく話せる人が多く、他の南米日系人社会と比べても、日本らしさを保ち続けている。近代化された農業施設、医療センターなどが整備され、まるで日本の田舎にきたような印象を受ける。私が訪れた時も、9月の暑い気候の中で、そこが南米なのか日本なのか、わからなくなるほどであった。

出迎えてくれたサン・フアン農業協同組合会長は、日系二世で、農業で成功した人の1人である。連れて行っていただいた地元の食堂では、川魚の刺身や、日本でも売っているようなパンが出された。地元の商店では、手作りのイカの塩辛や豆腐を買うこともできる。主産品は



サン・フアン移住地近くの川魚の刺身

米、大豆、柑橘類、マカダミアナッツ、牛肉、鶏卵などであり、米はボリビア国内でも有数の産地となっており、日本米も作られてい

（執筆に当たり、サン・フアン移住地出身の池田潤平氏、山本エレナ氏の協力を得ましたので、記して感謝します）



近代的な農業施設



2012年7月14日にラパスで開催された野球大会

る。男たちの主な楽しみは川での魚釣りで、毎年釣り大会が開催されるとのことである（最近では以前ほど釣れなくなったとの噂も）。

ボリビアの日系人移住地は最初から成功したわけではなかった。当初は何もない未開の森林であり、幾多の苦勞の中で亡くなったり、

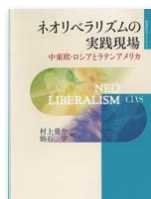
移住地を去った人も多い。苦難の歴史は、2000年に刊行された『日本人移住100周年誌「ボリビアに生きる」』に詳しくつづられている（http://www.fenaboja.com/libros/l_boliiki.htm）。現在ボリビアに居住する日系人は、当初ペルーに入った移民が、アンデス山脈を越えてボリビアに入っていったのだが、鉱山で働いたり、熱帯のベニ県やバンド県に留まった人も多くいる。様々な苦勞の後、今日の移住地や各地の日系人社会がある。

とはいえ休暇中であつた私は、移住地のあちこちを紹介してもらった後、エアコンが効いた涼しい部屋で熟睡した上に、農協会長のご自宅で振る舞われた1年ぶりの素麺に舌鼓をうったのであつた。それからしばし、日系人移住地の将来に思いを馳せた。ボリビアは豊かな大地に恵まれているが、政治経済には課題が多く、個人の努力が報われるような環境とは言い難い。日本人として生きていくのか、ボリビア人として生きていくのか、そういった問いかけも聞かれる。

それでも、自然の中でたくましく育った若者たちは力強い。1年後の2012年7月14日に首都ラパスで日系人野球大会が開催され、私は在留日本人チームの一員として参加したのだが、若きサン・フアン移住地チームの前にならなくも惜敗したのであつた。

・ 出版物の紹介 ・

地域研が刊行した出版物と、地域研スタッフが執筆・編集した出版物を紹介します。



CIAS 叢書「地域研究のフロンティア (Frontiers of Area Studies)」
ネオリベラリズムの実践現場
—中東欧・ロシアとラテンアメリカ—

- 村上 勇介・仙石 学 編
- 京都大学学術出版会
- 菊上製・320 頁・税込 4,410 円
- ISBN: 978-4876982721
- 2013 年 3 月刊



CIAS Discussion Paper Series No.30
情報をつなぐ、世界をつかむ

- 柳澤 雅之 編
- A4 判・67 頁
- 2013 年 3 月刊



CIAS Discussion Paper Series No.31
洪水が映すタイ社会
—災害対応から考える社会のかたち—

- 山本 博之・西 芳実 編著
- A4 判・79 頁
- 2013 年 3 月刊



CIAS Discussion Paper Series No.32
『カラム』の時代Ⅳ
—マレー・ムスリムによる言論空間の形成—

- 坪井 祐司・山本 博之 編著
- A4 判・41 頁
- 2013 年 3 月刊



CIAS Discussion Paper Series No.33
功徳の観念と積徳行の地域間比較研究
に向けて

- 兼重 努・林 行夫 編
- A4 判・111 頁
- 2013 年 3 月刊



CIAS Discussion Paper Series No.34
「トルキスタン集成」が拓く世界Ⅰ

- 帯谷 知可 編
- A4 判・47 頁
- 2013 年 3 月刊



CIAS Discussion Paper Series No.35
「トルキスタン集成」が拓く世界Ⅱ

- 帯谷 知可 編
- A4 判・72 頁
- 2013 年 3 月刊



CIAS Discussion Paper Series No.36
地域研究アーカイブズ
フィールドノート集成 6

- 高谷 好一 著
- A4 判・397 頁
- 2013 年 3 月刊



CIAS Discussion Paper Series No.37
地域研究アーカイブズ
フィールドノート集成 7～8

- 高谷 好一 著
- A4 判・449 頁 / 453 頁
- 2013 年 3 月刊



QALAM No.60-65 1955.07 ~ 1955.12

- 山本 博之 監修
- 京都大学 地域研究統合情報センター
- A4 判・530 頁
- 2013 年 2 月刊



QALAM No.66-71 1956.01 ~ 1956.06

- 山本 博之 監修
- 京都大学 地域研究統合情報センター
- A4 判・600 頁
- 2013 年 3 月刊



QALAM No.72-77 1956.07 ~ 1956.12

- 山本 博之 監修
- 京都大学 地域研究統合情報センター
- A4 判・604 頁
- 2013 年 4 月刊



AMÉRICA LATINA EN LA ERA
POSNEOLIBERAL: DEMOCRACIA,
CONFLICTOS Y DESIGUALDAD

- MURAKAMI, Yusuke
- ベルー : Instituto de Estudios Peruanos
- A5 判 248 頁 35 スエボ・ソル
- ISBN: 978-9972513954
- 2013 年 3 月刊

今後の注目イベント

PNC Annual Conference and Joint Meetings 2013

「人文科学とコンピュータの新たなパラダイム」



日時：2013年12月9日（月）～14日（土）

場所：京都大学百周年時計台記念館

主催：Pacific Neighborhood Consortium (PNC)
Electronic Cultural Atlas Initiative (ECAI)
情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会
(SIG CH)
京都大学地域研究統合情報センター (CIAS)
京都大学東南アジア研究所 (CSEAS)

共催：人間文化研究機構 (NIHU)

協賛：Asian Network for GIS-based Historical Studies
(ANGIS)

趣旨

資源の循環や人的交流のグローバル化、地球規模での環境変化や大規模災害など諸課題が多様化・複雑化している現代社会において、問題解決に対する「知」もまた、多様化・複雑化しています。こうした諸課題に対応し豊

かな社会や環境、文化を育むためには、細分化された「知」は地域や人々の活動と結びついた「知識」として、再構築される必要があります。これに呼応し、情報学の分野においても、オントロジー、セマンティック Web、LOD (Linked Open Data) といった研究やデジタル化、データベース、時空間情報処理などの研究手法が活発に展開されています。その成果は、人文科学領域にも大きな影響を与え、歴史情報学や地域情報学などの新しい研究の潮流を生み出しつつあります。

本会議は、人文学や情報学を中心としつつ、問題意識を共有するあらゆる分野の方々の学術研究や社会実践の発表と議論の場です。環境、健康、災害等の喫緊の社会的課題に対応するための知を、地域や地域の人々の活動と結びついた「知」として再構築することを目指します。地域研も主催組織の一つとして、本会議の企画に加わっています。ふるってご参加下さい。

最新の情報については、地域研 HP などをご覧ください。
(原正一郎)

The Last Photograph

Seventeenth Century Japanese Merchants at Guadalajara

(17世紀メキシコに生きた日本人商人たち)



the Cathedral of Guadalajara

In the seventeenth century the New Spain (Mexico) had established close relationships with Asia. The Galleon of Manila made transpacific voyages every year from Manila to Acapulco for more than two centuries (1665-1810). In these long journeys Japanese, Chinese and Philipppines traveled to New Spain in the Galleon or directly from Japan.

In that Century, we found four Japanese living at Guadalajara. Two of them became important actors at Guadalajara's society. Juan de Páez, a Japanese from Osaka, became the administrator of the finances of the Cathedral, he was the first to occupy that post and kept it for twenty years until his death. He married Margarita de Encío, the daughter of another Japanese: Fukuchi Hyoemon whose Christian name was Luis de Encío. Fukuchi was married to a native, Catalina de Silva. Being a merchant, Fukuchi was the nucleus of the Japanese group living at Guadalajara at that time. And it may be, that the nine children of Juan de Páez and Margarita de Encío, were the first descendants of Japanese and Mexican blood.

(Melba Falck)

表紙写真について

The Schröder house in historic Göttingen, a town mostly known for its world famous university, founded in 1734 / Wil de Jong

京都大学地域研究統合情報センター
ニュースレター No.13

●発行日 2013年9月30日

●発行者
京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
Tel : 075-753-9603
Fax : 075-753-9602
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

●編集責任 福田宏・谷川竜一

●編集協力・表紙デザイン 川島淳子